

# NEWSLETTER

No.8

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会報 第8号

(2009年2月)

内容	宮崎県JICA派遣専門家連絡会の紹介 (永田雅輝) .....	1
	シニア海外ボランティアを経験して (倉谷重嗣) .....	4
	もっと地元の魚を食べませんか?~朝日新聞「かごしま彩時記」より~ (大富 潤) .....	6
	平成20年度会員活動報告 .....	12
	ブラジルのなかの日本 (中畑勝見) .....	12
	ブータン職業訓練調査団に参加して~ブータンの暮らしを垣間みる~ (馴田義美) .....	14
	平成20年度「連絡会」活動報告 .....	19
	平成19年度「連絡会」総会報告 .....	20
	シニア海外ボランティア 日系社会シニア・ボランティア募集 .....	23
	鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項 .....	24

## 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の紹介

宮崎県JICA派遣専門家連絡会  
会長 永田 雅輝

### 1. 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の概要

#### (1) 設立

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の設立に当たっては国際協力事業団九州支部の指導のもとで、平成6年3月22日、関係する県内在住の派遣専門家18名のうち13名の出席を得て結成会を発足させ、宮崎県の国際交流事業の促進と充実、国際交流活動の有効な発展に資することを目的に「宮崎県JICA派遣専門家連絡会」の名称で発足した。

#### (2) 規程 (抜粋)

<趣旨> わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び宮崎県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識、エネルギー等を結集して、前記の動向の友好的発展に資するとともに、県内の現居在り地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

<事業> 本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係る事業を行う。

- ①ODAの進展動向に関する調査研究および提言
- ②JICA及びJICA九州支部（現国際センター）の業務遂行の方途に関する助言、支援等
- ③宮崎県と諸外国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- ④会員相互の情報交換、交流、親睦に関すること

#### (3) 役員

平成6年度～平成11年度

会長：玉井 理（宮崎大学農学部）

幹事：足立泰二（宮崎大学農学部）、  
山本正悟（宮崎県）、

JICA九州支部長

平成12年度～平成15年度

会長：玉井 理（宮崎大学農学部）

幹事：永田雅輝（宮崎大学農学部）、

山本正悟（宮崎県）、  
位田晴久（宮崎大学農学部）

平成16年度～平成19年度

会長：永田雅輝（宮崎大学農学部）  
幹事：位田晴久（宮崎大学農学部）、  
山本正悟（宮崎県）、  
大野和朗（宮崎大学農学部）

平成20年度～

会長：永田雅輝  
（宮崎大学名誉教授・みやざきTLO）  
幹事：位田晴久（宮崎大学農学部）、  
山本正悟（宮崎県）、  
大野和朗（宮崎大学農学部）、  
佐伯雄一（宮崎大学農学部）

#### (4) 会員数

H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
18	22	23	33	—	35	31	44	—	51	62	62	60	58

上段：年次、下段：人数、—：不明

## 2. 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の主な活動

### (1) 総会

総会は年度終盤の2月、3月を目途に年1回開催している。総会には、JICA、宮崎県、国際交流団体等の関係者を来賓として招待している。内容は、本会の活動報告や講演会（会員や会員外による現地活動報告等）、交流会等の行事を実施している。これらの活動報告は、会報誌「JICAエキスパートみやざき」に掲載して会員への情報提供としている。

本会の運営はJICAの活動支援経費を活用しているために、別立ての会費徴収はしていない。しかし、総会後に行う懇親会、交流会、意見交換会の経費はその都度参加料を徴収している。平成12年度からは宮崎大学に在籍する留学生にも参加を呼びかけて、会員との交流を図っている。会員が活動した国の留学生がいると当時の活動の話題で盛り上がり、国際交流の活性化に繋がる。総会には毎年25～30名前後の出席を得ている。その内訳は来賓関係4～7名、会員14～16名、留学生6～8名である。

### (2) 会誌「JICAエキスパートみやざき」の発刊

会報は平成9年度から編集を始めた。この活動は九州圏内では熊本県に次いで2番目に早い取り組みであったことから、当時のJICA九州支部所長からお褒めの言葉を頂いた。その理由は、会の設

立への取組みは遅かったのに会誌発行への取組みは早かったことからと推察される。会報は年1回発行し、会員、関係機関、他県連絡会等に配布している。会誌を通して情報提供を行うと共に国際協力活動の発展を狙うものである。平成19年度で10号となった。コンテンツを見ると本会の活動が垣間見られる。その一覧を下記に紹介する。

#### ・創刊号（1998年2月）

会報の発刊に当たって 玉井 理（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）

会報の発刊によせて 表伸一郎（国際協力事業団九州国際センター所長）

会員の現地報告シリーズ1 ケニアの人と自然  
山下研介（宮崎大学農学部）

#### ・第2号（1998年11月）

JICA派遣専門家の殉職に思う 玉井 理（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会報第2号によせて 中垣長睦（国際協力事業団九州国際センター所長）

会員の現場報告シリーズ2 ホンジュラス国と水資源 秋吉康弘（宮崎大学農学部）

#### ・第3号（2000年3月）

青年海外協力隊OB会との連携 玉井 理（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）

会員の現地報告シリーズ3 ケニア農耕文化を訪ねて 小川喜八郎（宮崎大学農学部）

#### ・第4号（2001年4月）

20世紀最後の年 玉井 理（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）

国際協力の地方展開と経験の継承 伊坂 潔（国際協力事業団九州国際センター所長）

会員の現地報告シリーズ4 アルゼンティンに想う 原田 宏（宮崎大学農学部）

口蹄疫病にちなんで 吉山武敏（会員）

ある難病患者の国際会議 玉井 理（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）

こんばんは、ハノイのさえきです。みなさんげんきですか。 佐伯雄一（宮崎大学農学部）

#### ・第5号（2003年3月）

帰国専門家中央連絡会に出席して 玉井 理（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の皆様へ 山口三郎（国際協力事業団九州国際センター所長）

会員の現地報告シリーズ5 田園の香りがする  
埃レストランのヴェトナム 山口良二 (宮崎  
大学農学部)

・第6号 (2004年3月)

独立行政法人国際協力機構の発足にあたり 玉  
井 理 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の10周年に寄せ  
て 山口三郎 (国際協力事業団九州国際セン  
ター所長)

ハノイ農業大学強化プロジェクト雑感 佐伯雄  
一 (宮崎大学農学部)

ブラジル遥かなり 南嶋洋一 (会員)

私の国際交流 吉山武敏 (会員)

・第7号 (2005年3月)

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の役割 永田雅  
輝 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)

着任のご挨拶 笠原秀昭 (国際協力機構九州国  
際センター所長)

「JICA青年招へい事業」における宮崎県の受入  
れ 岩元巖男 (ユースワーカー能力開発 宮崎  
県支部長)

雑感 吉山武敏 (会員)

・第8号 (2006年2月)

宮崎県JICA派遣専門家連絡会と宮崎大学との  
連携 永田雅輝 (宮崎県JICA派遣専門家連絡  
会会長)

九州国際センターでの2年目を迎えて 笠原秀  
昭 (国際協力機構九州国際センター所長)

黒龍江省乳業酪農計画について 川原隆二 (前  
家畜改良センター宮崎牧場)

・第9号 (2007年2月)

宮崎県JICA派遣専門家連絡会に期待したいこ  
と 永田雅輝 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会  
会長)

JICAプロジェクト ベトナム食品工業研究所  
強化計画に参加して 小川喜八郎 (南九州大学  
健康栄養学部)

ブラジルでの経験を活かして国際協力推進員へ  
佐藤愛美 (JICAデスク宮崎 国際推進員)

・第10号 (2008年3月)

宮崎県の国際化推進における専門家連絡会の役  
割 永田雅輝 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会  
会長)

スリランカにおける野球隊員としての2年間

後田剛史郎 (宮崎大学農学部)

宮崎大学における国際協力の取組みについて

甲斐榮一 (宮崎大学農学部国際連携センター)

(3) パネル展示会の開催

広報活動としてJICA、大学との共催によるパ  
ネル展を開催している。例えば、平成7年11月の  
宮交シティアポロの泉広場における国際協力写真  
パネル展、平成9年1月、同年11月にはJR宮崎  
駅中央コンコースにおいて国際協力写真パネル展  
を開催した。また、平成18年2月には宮崎大学附  
属図書館において国際協力の推進に関する写真及  
び図書の展示を開いた。展示会では、JICA組織  
や本連絡会の会員の活動写真の展示、国際協力に  
関連する図書の展示を行い、学生諸君らにJICA  
活動を理解してもらうことである。

(4) 宮崎大学との連携・協力の開始

本連絡会には宮崎大学教員の会員が数多くい  
る。その宮崎大学では、大学の国際化を推進する  
に当たり、開発途上国等に対する国際協力を主要  
な柱と位置づけ、JICAとの連携強化を目指して  
平成17年12月にJICAとのコンサルタント契約を  
結んだ。このことは将来の国際協力を担う人材育  
成の計画において、大学が実施する講義や国際協  
力活動に本会員が協力できる可能性が生まれるこ  
とになる。

平成17年度はその実現に向けて、大学と本会と  
の共催で宮崎大学国際化特別講演会と銘打って  
「宮崎大学のさらなる国際化推進に向けて－国際  
協力機構 (JICA) 等との連携強化－」を企画し、  
JICAから宮崎県出身の人間開発部長 (当時、現  
在は上級審議役) 末森満氏を講師に招き特別講演  
会を企画した。講演会は平成18年2月に実施し、  
末森満部長には「国際協力と大学連携」と題して  
話をして頂いた。この講演会によって、宮崎大学  
がどのような形で国際協力を推進できるか、将来  
の国際協力を担う人材の育成の考え方など、多様  
な国際協力の現状を学ぶことが出来た。

このように大学との連携でJICAに関する行事  
が共催できたことは、大学と本連絡会の連携・協  
力のあり方の初めての試みとしては大成功と言  
え、本連絡会にとっては大きな前進であり、今後  
の活動における大きな布石を作ることが出来た。  
この活動は、平成19年度のJICA九州国際センター  
の資料 (JICA派遣専門家連絡会説明会) に「期

待される活動内容の事例紹介」として取り上げられ嬉しかった。

これ以降、宮崎大学ではJICA関係の事業案件が増えたことは大きな成果である。その実施例を紹介すると、平成18年度は、国際連携センター内に「国際協力プラザコーナー」の設置（4月）、JICA日系留学生1名の受入れ（4月）、JICA日系研修事業にかかる研修員受入れの開始（10月）、地下水ヒ素汚染による健康被害とその対策に関する国際シンポジウムの開催（11月）、平成19年度ではJICA地域別研修「中東地域 女性の健康支援を含む母子保健方策」の開始（6月）、平成20年度では、JICA草の根技術協力事業「インドUP州における地下水ヒ素汚染の総合対策」の開始（6月）、JICA地域別研修「中東地域 女性の健康支援を含む母子保健方策」の開始（6月）などである。

### 3. 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の役割と今後の課題

JICAのHPから専門家連絡会の活動と役割を要約すると、JICA国内機関や青年海外協力隊OB/OG会、各都道府県の国際交流協会等と連携して国際協力に関する理解と促進の活動、帰国専門家間の交流、JICA事業への支援等が掲げられている。そしてJICAは、そのような専門家連絡会の活動に対して、地域におけるイベント・シンポジウム等の共催や後援、活動経費の補助、情報提供、活動全般の後方支援等を行っている。

そこで、本連絡会は、JICA派遣専門家連絡会

の本道を忘れずに、技術協力の担い手として、国際協力の理解者として、ODA現場の体験者として、地域における国際協力・交流の促進に貢献できるように取り組みたい。幸い宮崎大学とJICAとの連携・協力が濃密になってきていること、また宮崎大学所属の会員がもっとも多い（21名）ことなどの理由から、本連絡会と大学とが協力して国際活動支援体制をもっと強化して行くことが今後の課題である。

一昨年9月、JASSO事業で帰国留学生の教え子が勤務するカトマンズ大学を訪れた際、時間を見てJICAネパール事務所の丹波憲昭所長を訪ねた。話が進むに連れて当国でのJICA専門家の重要性が思い知らされ、自身のケニアでの専門家時代が脳裏に浮かび、年令が許せば再度挑戦したくなった。

最後に、宮崎県JICA派遣専門家連絡会の活動へのご協力・ご高配をよろしくお願い申し上げます。



JICAネパール事務所にて（中央が丹波憲昭所長、07.9）

## シニア海外ボランティアを経験して

倉谷 重嗣

この度は専門家の機関紙に寄稿できますことを光栄に思います。私は2006年68歳の誕生月にフィジー放送公社のマイクロウェーブリンクサーベイの技術指導で8ヶ月ほど派遣されました。専門家なら処遇面は優遇されたでしょうが、私はJICAにとってはコストパフォーマンスのよいシニアボランティアでした。ともあれ人生の第2の選択肢として楽しいJICAの海外ボランティア活動をお

勧めします。まだまだ役に立つシニアです。特に途上国ではシニアの生き様、技術、人間性がきっと喜ばれることは必定です。JICAの選考試験は資格試験、入学試験でもない相手国との出会い結婚みたいなものです。自分の職種技量や語学とか迷ったらまず応募されることをお勧めします。もしかしたら最難関は健康かもしれません。厳しい世の中とはいえ、日本は途上国に比べたらまだ飽

食です。われわれの体は贅肉がついてメタボの傾向があります。私も現職時代は健診にバッドマークが3つもありました。応募を決めたら健康診断をクリアするため節食と運動をお勧めします。私は登山でクリアしました。また任国でもエベレスト初登頂のヒラリー氏が会長を務めたこともある登山クラブに加入して、英米仏豪中印の皆さんと山小屋で自炊の役割を分担して同じ釜の飯を食べました。この登山クラブでは最高齢でした。フィジー最高峰ビクトリア山に登頂したときジャパンアズ No.1 とお世辞がもらえました。豪雨のなか参加者30名中頂上には20名足らずしか見当たりませんでした。私は短期のシニア海外ボランティアとして自分の技術を伝授するのみならず、任国の一般の人々に触れたいと強い思いを抱きました。

初老のシニアには圧倒的に男性が多いです。比べて青年海外協力隊の隊員は女性が圧倒的に多いです。遠い任国で活躍している薩摩オゴジョに感動しました。

女性の活躍に比べて日本全体で男性の退化現象が起っています。明治維新を行ったわが薩摩の祖先に比べて今の男の子もひ弱な感じがします。教育制度、社会制度、政治制度の何が原因か知りませんが冒険心と挑戦精神に翳りが見える昨今です。薩摩の伝統精神「ぼっけもん」と「てげてげ」精神は途上国では十二分に活用できます。

さて専門を少し紹介します。フィジー放送公社はラジオ2波エフエム4波10チャンネルの音声放送をフィジー全土に行っています。

放送波中継では混信妨害や高音質放送ができないなどの問題があり、これをマイクロ波に乗せて330ある島の全土をカバーしようと調査を始めました。到着してすぐに政府庁舎に行き全土の5万分の1の地図20枚を購入しスタジオのフロアに広げてつなぎ合わせてフィジー全土の大きな地図を作成、これからマイクロ波を定めて線を引き障害となる山岳を避けてプロフィール用紙に机上プランを作りました。それから現地調査にGPSを携帯してデータを集めて資料を作成した。マイクロ波は光に近く直進性を持っています。海上伝播では直接波と海上反射波と干渉が起こります。潮の干満差によって反射波が変動して電界が不安定になります。これは高校数学の三角関数で解くことができます。対策としてはマイクロルー

トを二重化するしかありません。所謂スペースグライダーシティーです。さてマイクロ波は決まりました。10チャンネル音声の多重化の問題がありますが、日本では未開発です。デジタル化では実現はできません。圧縮したらデジタル化では遅延の問題があります。放送局から出た電波が末端では3秒遅れにもなります。開発費がいくらかかるか？日本製は高価なのでオーストラリアやイタリアの安いメーカーを当たりましたが満足な回答は得られませんでした。設備費に10億円はかかるかと積算しました。年間予算3億円の放送局でとても手の出る金ではありません。回線ルート確認するため1chでもマイクロ回線化したい。そこで日本の放送局にあたって古いアナログの機械を探してみました。もしあれば政府間の草の根援助を使ってフィジーに送ってもらうことも念頭に置いた。アナログの機械でもラジオ2波とマイクロ伝播ルートの検証は可能なので目処をつけたかったが日本国内から快諾の返事はなかった。帰国直前までばたばたと画策したが期限切れとなってしまった。現地の放送局に帰国してから詳しい英文化した論文を送ると約束したが帰国してしまうともうやる気は失ってしまった。ほんとにマイクロ回線を実現する気があるのか、予算の裏づけはあるのかが決まらなると徒労になる気がした。ただ任国に調査資料として地図にプロットしたマイクロ波ルートマップは置いてきたのでいずれ誰かが将来参考にするだろうと思っています。

話は変わりますが、滞在中にトンガ沖でマグニチュード7.2の地震が発生とNHK国際放送が報じている。私の所属の地元放送局が報じたのはそれから1時間半たってからでした。もし大津波が押し寄せたら海岸地域にへばりつく住民に大きな被害が出たでしょう。おおらかな国民性からか防災システムの欠陥や貧弱を議論するものは居なかった。おそらく大きな被害が出てからおおらかな議論をするのだろう。

また話し変わって、大阪大学の大学院春日教授はフィジー研究30年のベテランで、フィジーに関しては担当者が数年で交代するJICA現地事務所より詳しいと自負されていたが、突然私に電話してきた。夕食を食べながらフィジーの障害者や老人問題を話された。老人ホームでボランティア活動もやっているとのことで私に誘いをかけた。

私が最高齢で話がわかると狙いを定めたらしく、30人分のオムツをスーパーマーケットで買って教授の居る老人ホームを訪ねた。教授は風土病などで苦しんでいる老人を抱き起こし頬ずりしながら私に握手させた。にっこりと笑った老人たち、なんだ自分も老人ではないか。この人たちは私より年下である。私の年齢では寿命で、長く生きながらえることが果たして幸せなのか、働いて働いてある日ぽっくり死んだ今までのフィジアンが生活がよかったのではと思うこともあると教授は話した。フィジーではまだ障害者も家の恥と隠す傾向がある。前に述べた登山の途中で立ち寄った村の難病の少女を隊員が抱きかかえ励まし、後日120年の歴史ある教会で高額な手術基金を作ろうと登山クラブで発案された。

私は任国でのアパートも自分で探した。英国人の経営するアパートの契約はかなり面倒であるが現地インド人経営のアパートはてげてげ精神で簡素であった。掃除人はお向かいの若奥さんをお願いした。ガス欠の時には夫が20kgのガスボンベを担いで持ってきてくれた。治安の問題もあるだろうが日本人はやや高級なアパートに仲間と群れをなしてる。私はそれには抵抗を感じた。JICAに言わせれば安全管理の心配があるのだろう。JICAにとっては登山クラブへの入会もあまり薦める話ではないだろう。だが任国での交流はほっけもんが必要かもしれない。短期間で一般人との交流は思う存分果たしたと満足感があります。

ともあれ途上国は19世紀以降の欧米の植民地

政策の歪みがあり、南太平洋の楽園にインド人を人口の半分フィジー国に労働者として移民させた。日本の半分に中国人を住まわせたようなものでギクシャクするのは必定である。大国横暴の現実には生きた世界史の遺物として見て取れる。また近年途上国へ進出する中国の積極姿勢が見られる。

先年高校の世界史がないがしろにされたが内向き箱庭日本のまさに象徴的できごとであった。また日本では毎日垂れ流される品のない低俗な罵り合いの傍若無人のメディアから離れると、読書の意欲が湧き純朴な真の人間愛に触れることがこの上ない喜びとなる。8ヶ月の短い滞在期間でしたが68歳にして大海を知り、人間の心の触れ合いの喜びを体験できた。残された人生をプラスにする糧になったと思います。またこれからシニア海外ボランティアを目指す人たちや次世代の若者にこの体験を享受してもらい少しでも参考になれば幸せと思います。



フィジー最高峰ビクトリア山登頂後村の子供たちと交流

## もっと地元の魚を食べませんか？

～朝日新聞「かごしま彩時記」より～

鹿児島大学水産学部 大富 潤

私が働いている鹿児島大学には世界各国から留学生がやって来ます。我が水産学部では特にたくさんの方の留学生が水産学の理論や技術を学んでおり、キャンパスには少しインターナショナルな雰囲気があります。私の研究室にも現在3名の留学生がいます。

留学生たちは水産学部で学んだ経験や研究成果

を母国に持ち帰り、母国の水産業の発展に大きく貢献します。ところが、彼らが学ぶここ鹿児島は、海に囲まれているにもかかわらず農・畜産色が濃く、海・さかな・水産業に関することはあまり知られていません。私は常日頃から、農・畜産県鹿児島一般消費者の方々にも少しでも海に関心を持ってもらい、地元の海の幸をもっとたくさん

食べて欲しいと思っています。

このような土地で水産業を活性化させるためには消費者意識と食習慣を変えることが必要不可欠ですが、とても時間のかかることです。それにめげず、草の根的でありながらも継続的に消費者啓蒙を行うことにより、魚離れの流れに逆行していきたいと思っています。2008年秋に、新聞紙上でそんな思いを綴る機会を得ました。志賀美英会長の命により、朝日新聞のコラム「かごしま彩時記」に掲載された原稿を、何枚かの写真とともに紹介いたします。

### 1. 懐が深い錦江湾の魅力 (2008年9月12日)

今、鹿児島にゆかりのある歴史上の人物で最も有名なのは、天璋院篤姫かもしれない。NHK大河ドラマ「篤姫」の影響は大きい。「そのころ薩摩では…」のナレーションとともに映し出される鶴丸城。その窓から臨む桜島は、錦江湾の青い水面(みなも)に鎮座している。

篤姫も眺めた錦江湾。どんな時代にも、多くの人々に愛されてきたことだろう。ところが今、「錦江湾はどんな海? どんな生き物がすんでいる?」と地元の人に聞いても、すぐ答えは返ってこない。「目の前にあるのが当たり前。好きではあるが特に関心はない。」というのが正直なところかもしれない。

一方、「桜島が今年初めて冠雪した」「出水平野にツルの第一陣がやってきた」「今年も超早場米の収穫が始まった」といった陸上の出来事にはとても関心が高い。季節を感じるイベントとしてマスコミも毎年のように報道する。

私たち人間にとって、陸上の出来事は肉眼で容易に見ることができる。一方、海はせいぜい波打ち際や海面くらいしか確認できない。たとえ目の前に海があっても、少しでも海中に入れば、そこは「未知の世界」である。

私たちが日々眺めているのは、錦江湾の外側の光景に過ぎない。愛する海なら、その内側、普段はなかなか見られない水面下の様子まで知りたい…。

実は、錦江湾は包容力のある父親のように、あるいは優しい母親のように、とても懐の深い海である。海洋学の分野では、水深200m以上の海域を深海と定義する。火山活動による陥没で生まれ

た錦江湾は、半閉鎖的内湾でありながら中央部の水深が230mを越える「どんぶか」の海だ。我が国では、内湾でありながら深海でもある海は、錦江湾のほかにはない。

一般的に、内湾の水温は気温に左右されやすく、冬はかなり低下する。ところが、九州の南方沖を流れる黒潮の影響で、錦江湾の水温は冬でも比較的高い。鹿児島県が暖海性の魚、カンパチの養殖生産量全国第1位になり得る理由の一つがここにある。

篤姫の時代、錦江湾についてどの程度知られていたのだろうか? エビ・カニ学に携わる私は、「篤姫」の第1回放送で登場した幼少の篤姫(於一)が錦江湾の浜辺で小さなカニを捕まえ、奥女中の菊本を驚かすシーンが目に焼きついて離れない。あのカニの種名は? 性別は? …調べてみたいことが箇条書きできる。

しかしながら、本当の錦江湾の魅力は、浜辺ではなく、あまり人の目に触れることのない所にある。目の前の穏やかな深海、その海底にすむ生き物たちの神秘に、私の探究心は大いに駈り立てられている(図1)。



図1. 鹿児島大学水産学部附属練習船南星丸を用いた錦江湾の試験底曳網調査。留学生も加わる。

### 2. 世界でここだけのエビ (2008年9月26日)

「日本でここだけ、世界でここだけ。錦江湾はそんな海です」。これまでの授業や講演会の場で何回繰り返してきたことだろうか。ある深海生物と、それを捕ることを生業としている漁業者たちの相克を伝えたい一心で。

半閉鎖的内湾でありながら深海でもある錦江湾には、「とんとこ網」と呼ばれる伝統的な漁業が

ある。船尾から1000m以上ものロープを繰り出し、湾中央部の深海底に網を下ろしてエビや魚を捕っている。

この漁業で垂水や鹿屋の漁業者たちが主に対象としているのはナミクダヒゲエビである。地方名「あかえび」。クルマエビ上科・クダヒゲエビ科に属し、インド-西太平洋の水深150～400mの海底にすむ、赤くきれいなエビだ。

本種は稀有な深海生物で、本来は沖合の大陸棚縁辺から陸棚斜面に低密度に棲息するため、容易には漁業の対象になり得ない。ところが、錦江湾は目の前にある深海。世界で唯一、本種を捕ることで生計を立てている漁業者が存在する海なのである。

ナミクダヒゲエビは深海性のエビ特有の甘みがあり、とてもおいしい。魅力的な地元の水産資源だ。ところが捕るのは簡単ではない。深海である上、本種は外敵から身を守るため索餌の時以外は海底の泥に潜っていることが多い。このエビを効率的に漁獲するには技術が必要である。ロープの長さや比重、網を引く速度…。漁業者は長年の経験から技を磨いていく。

一方、エビにも“技”がある。ナミクダヒゲエビの第1触角は他のエビに比べてかなり長く、4本の鞭状部はススキの葉のように平らな形をしている。これらを束ねると、「くだひげえび」の名の由来でもある1本の管になる。泥の中にいると呼吸に必要な酸素は尽きてしまうが、この管の先端を水中に出すことで、新鮮な海水を取り込むことができるのだ。

ところで、第1触角を海中に出した状態で、体をより安全な深さまで泥の中に潜らせるにはどうすれば良いだろうか？ 答えは「えびぞり」である。ナミクダヒゲエビは、トリノ五輪金メダリストの荒川静香選手顔負けの、あの技ができるエビなのだ！ 荒川選手はギャラリーを魅了するため、そして本種は命を守るためのイナバウアーを披露するのである（図2）。

「世界でここだけ」のナミクダヒゲエビだが、残念ながら地元での認知度はまだ低い。「かごしま旬のさかな」にもリストされていない。「何とかしなければ」。錦江湾で研究を始めて16年。漁業者とともにずっと考え続けてきた。この魅力的な水産資源の有効利用のため、私たちの二人三脚

は終わらない。

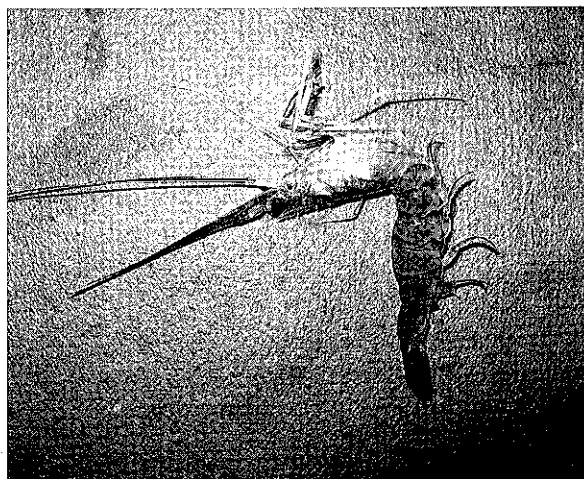


図2. これが錦江湾のナミクダヒゲエビ。もっと有名にしたい。

### 3. 地元産の魚を食卓に（2008年10月3日）

小さい頃から魚が好きだった。水族館にも通ったが、それ以上に鮮魚店で魚を見てまわるのが好きだった。もちろん、それは今でも変わらない。

鹿児島市中央卸売市場魚類市場は私の好きな場所の一つだ。通常私たちが活動する時間帯には「兵（つわもの）どもが夢の跡」状態で閑散としているが、夜明け前の魚類市場は活気にあふれている（図3）。



図3. 早朝の鹿児島市中央卸売市場魚類市場。定置網で漁獲されたブリの水揚げの様子。

岸壁から漁獲物を水揚げする漁業者。良く通る威勢のいい声で場を仕切るセリ人。魚を吟味して仕入れる仲買人。人々でごった返す中を行き交うフォークリフト。鮮魚の扱いは迅速さが要求されるため、すべてが時計を早回しするようなペースで動いている。

「今日はどんな魚が水揚げされている？」。目立



つ存在はマダイ、カツオ、タチウオ。南国らしくハタ、フエダイ、フエフキダイの仲間も数多く水揚げされる。今の時期なら、マグロに負けない存在感でバショウカジキが並ぶ。定置網や流し刺し網で捕られ、年によって漁の豊凶が激しい。鹿児島では「秋太郎」。秋を告げる魚だ。

地産地消が当たり前だった水産物は、冷凍技術の発達や交通網の整備などで地域性も季節性も失った。その中で、秋にしかない冷凍されない秋太郎は、今でも地産地消を貫いている。

鹿児島市内で30年近く鮮魚店を営む渡辺友義さんは、毎朝魚類市場に通う。地元産と旬にこだわり、自分がおいしいと思う魚を仕入れる。ハマフエフキ、メイチダイ、ナンヨウカイワリ…。渡辺さんの店には、いつも鹿児島近海産の多様な魚種が並んでいる。

この“リトル魚類市場”は、私の行きつけの店である。週に3回は通う。「この魚の写真を撮らせる」「あの魚の料理法を教えろ」。夕方の忙しい時間帯に邪魔をする私に、いつも笑顔で対応してくれる。他の客にも、食べ方や味の特徴などを丁寧に説明している。常連客は口々に「この店はめずらしい。ここでしか手に入らない魚がある」と言う。よくわかる。

渡辺さんにはほとんど休日がない。1日の仕事は未明の魚類市場での仕入れで始まり、夜の閉店まで続く。「一年中働いているよ」。楽しそうに話す渡辺さんの顔は充実感で満たされている。

農畜産県の鹿児島には、残念ながら地元産の魚が多数並ぶ鮮魚店やスーパーは多くない。地産地消にこだわる店は少数派だ。必然的に、家庭の食卓に上る魚介類のレパートリーも少なくなってしまう。

水産業活性化の鍵は消費者が握る。魚類市場の多様な種類の魚を、そのまま家庭に持ち込むことができれば、それが理想である。まずは、地産地消にこだわる鮮魚店とその常連客を増やすことからだ。

#### 4. こだわりの味 楽しみ (2008年10月10日)

映画「ジョーズ」を見たのは小学生の頃だった。凶暴なサメが人を襲うシーンは衝撃的で、今でも私の脳裏に焼きついている。

しかしながら、これは映画の中の話。ホオジロ

ザメやイタチザメなど「人食いザメ」と呼ばれる一部の大型の種は人に危害を及ぼすことがあるが、他の海難事故と比べると決して頻度は高くない。逆に、人間がサメを食べる機会のほうが圧倒的に多いのである。

「フカひれ」は中華料理の高級食材としてよく知られるが、食べられるのはひれだけではない。サメの肉はアンモニア臭がするとされる。だがそれは、鮮度が落ちると体内にたまった尿素が分解されるためで、新鮮な個体は心配ない。

志布志市では、毎年4月29日に行われる伝統行事、お釈迦祭りでサメを食べる風習がある。スライスしたサメの肉をさっと塩ゆでした「ゆでフカ」である。鹿児島で「のさ」と呼ばれるドチザメの仲間が最も美味とされる。

現在、このゆでフカの製造を一手に引き受けているのが有水港（みなと）さんである。その名が表す通り“海の男”を貫く有水さんは16歳で起業し、半世紀以上にわたって水産業に携わってきた。以前は鹿児島に何軒もあったゆでフカ製造業者も、今では有水さん1軒になった。「皆やめたが自分は続ける。絶やさないと」

先日、有水さんの仕事の一部始終を見せていただいた（図4）。ゆでフカ以外にも、様々な種類のつけ揚げ（さつま揚げ）やかまぼこなどの練り製品を製造している。

鹿児島はつけ揚げが特産なのに、なぜ地元産ではない冷凍スケトウダラを使っているのか？……常々こんな疑問を抱いていたが、有水さんはその流れに見事に逆行している。

毎朝、鹿児島市中央卸売市場魚類市場に自ら出向き、サメのほかエソやダツなど、地元産の鮮魚を仕入れる。山あいにある工場では、石臼、国産なたね油、地下150mの天然水を使う。もちろん冷凍スケトウダラは使わず、その日に仕入れた新鮮な地元産魚類を組み合わせ、「最高の味」をつくり上げる。

生魚を使っているため、厳しい工場排水基準が適用となる。天然の地下水は、飲料水基準をクリアしなければならない。その分の設備投資が必要となるが、環境への配慮、食の安全へのこだわりがあるからこそ、自らのハードルを高くすることも苦にならない。

魚だけでなく野菜にもこだわる有水さんは、自

家菜園にも取り組み始めた。「畑は素人。まだ試作品だけ」と言いながら、収穫したゴボウを見せてくれた。

海の男がつくった野菜の入るつけ揚げ。完成が待ち遠しい。

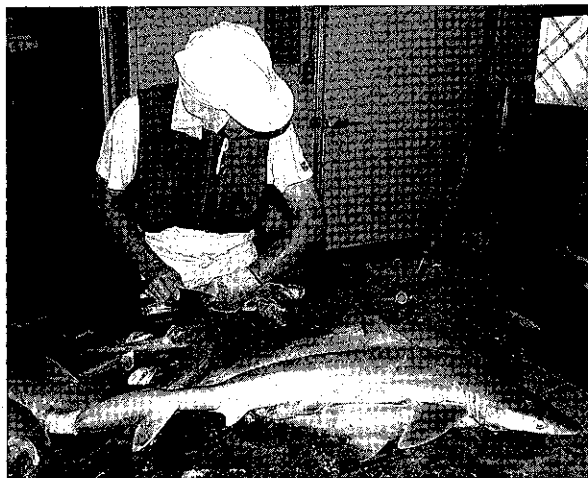


図4. ゆでフカを作るため、その日に水揚げされたサメをさばく。

#### 5. 海の姿子から親へ (2008年10月17日)

私が携わっている水産学は、食糧資源を扱う応用的学問分野である。「応用」だから学会活動だけで研究は完結しない。生産者や消費者に還元されてはじめて成果となるのだ。

鹿児島では、地元の海や水産業の実際の姿が、あまり消費者に知られていない。基幹産業の一つでもある水産業の発展、特に水産物の販路開拓を大きく妨げている一因だと思う。

「水産資源としての生物の研究も大事だが、地産地消の推進と消費者への啓蒙はさらに重要なこと。親から子どもへの伝達も必要だ。どうすればできる？」残念ながら一筋縄にはいかなかった。

講演や執筆活動を通じて大人の消費者を対象にアピールし続けた。ところが、その場では理解されるものの、次世代への伝達はあまり望めなかった。そんな中、発想の転換があった。「子どもは親の言うことを聞かないが、親は子どもの言うことを聞く」

自治体などと連携し、小・中学生の水産教育に力を入れるようになった。まずは出前授業である。学校に出向き、私自身の研究結果に基づく授業を行う。子どもにも分かる言葉や漢字を選ぶため、大人向けの10倍の準備が必要だが、地元の将来のためと思えば苦にはならない。「家に帰った

ら今日習ったことをお父さんお母さんに教えること！」必ず出す宿題である。

教室の中でできることは限られる。洋上に出て生産の現場に立会い、魚介類に触れ、食べる。ここ数年、これらを取り入れた漁業体験講座を行っている。場所は錦江湾。単なる「漁業の見学」ではなく、平易な言葉で専門を学ぶアカデミックな体験講座である(図5)。

講座の達成目標は、①錦江湾が大好きになる②錦江湾の生き物と環境を知る③錦江湾のすばらしさを伝える人になる…の三つ。講座の終盤には必ず参加者自らのグループディスカッションと全体発表会を行い、「伝える人」を養成する。

会場には、固唾をのんで我が子の発表を見守る父母や担任の教師、一般市民の姿がある。緊張しながらも発表を終えた子どもたちは、この上ない達成感を味わう。発表者も来場者も「もっと地元の魚を食べよう！」と盛り上がる。目標達成の瞬間だ。

出前授業や体験講座は、研究室に所属する学生にとっては教育の場でもある。ふだんは教えられる側の学生が講師となり、自らのプレゼンテーション技術を実践的に磨くのだ。もちろん講義の組み立て、声量、目くばせなど、十分な練習を積んだ上でのことである。

長時間におよぶ私の授業を最後まで集中して聴いてくれる子どもたち。意気揚々と講師を務める大学生。錦江湾の水産業の未来はきっと明るいはずだ！

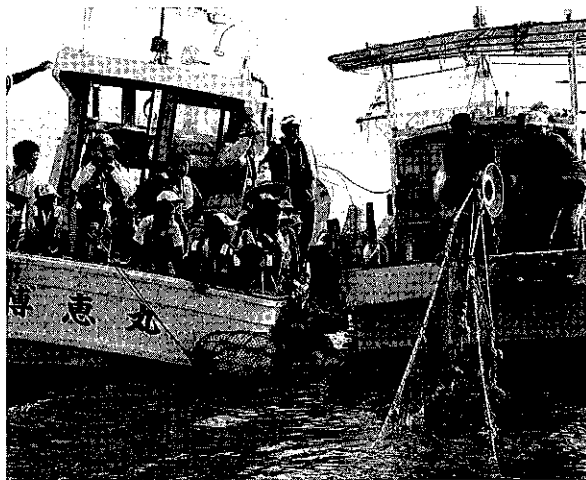


図5. 親子を対象とした錦江湾の漁業体験講座。船酔いせずに深海漁業が間近に見られる。

## 6. 世代つなぐ魚料理を (2008年10月24日)

日本人は魚をよく食べる。国民1人あたりの魚介類消費量は、アイスランドに次いで世界第2位である。水産白書によると、魚をたくさん食べる国は平均寿命も長い。現在、日本は世界一の長寿国でもあるが、同白書には「魚食文化が長寿実現の一翼を担っている」と書かれている。

しかしながら、年代別にみると、どの年代も魚を多く食べているわけではない。50代以上の人は魚を多く食べるが、40代以下では魚よりも肉を多く食べている。つまり、50代以上は魚食世代だが、それより下の人は肉食世代ということになる。

かつては若者も魚をよく食べたが、その世代は今、50～60代になっている。今の高齢者が魚を好んで食べるのは若い頃から食べ慣れているからであり、あまり魚を食べない今の若者は、年をとっても魚を食べないと予想される。つまり、数十年後の日本は肉食文化が隆盛することになる。「魚離れ」は周知の言葉だが、実は未来にまでそのルールが敷かれているのである。

「このままではいけない」と、魚離れを阻止する取り組みが各地でみられる。鹿児島県機船船曳網漁業者協議会による10月4日の「しらす・ちりめんの日」の提唱もその一つだ。

この日は、大阪府の多獲性魚有効利用検討会(現在の大阪おさかな健康食品協議会)が1985年に制定した「イ(1)ワ(0)シ(4)の日」でもある。「しらす・ちりめんの日」が同じ日になったのは、鹿児島近海で獲れるしらすは、主にカタクチイワシの稚魚だからである。

全国47都道府県の中で、鹿児島はしらす生産量で5本の指に入る。しらすの一大生産地だ。しかしその一方、消費量は下から数えて数番目の位置にある。鹿児島はしらすを「獲るだけで食べない」

県なのである。

地元での消費拡大を目指し、「しらす・ちりめんの日」にはいろんなイベントが開かれる。今年は第1回鹿児島県産しらす・ちりめん料理コンテストが行われ、多数の応募者の中から第一次審査を通過した10名が会場で料理をつくった。出場者自らが順番に作品に込めた思いをスピーチした後、試食と最終審査が行われた(図6)。

優れた作品がそろう中でグランプリに選ばれたのは、鹿児島市内の専門学校生、橋本慶子さんの「さつまキラキラちりめんの香り天ぷら」であった。受賞の決め手となったのは「祖母がよく使っていた食材で、父が喜ぶ料理をつくった」という本人の言葉。世代と世代を双方向につなぐ魚料理への思いが高い評価を得た。

このような料理が広まれば、魚離れのレールを断ち切るのに十分な力となるだろう。ただ魚を食べるだけでは、次世代の魚離れは防げないのである。



図6. 「しらす・ちりめんの日」に行われた鹿児島県産しらす・ちりめん料理コンテストの様子。どの料理も個性的で素晴らしかった。

## ブラジルのなかの日本

かごしま水族館 中畑 勝見

2008年、かごしま水族館が3年間にわたって行ってきたアマゾン川流域の子供たちを対象にした環境教育活動「パラ州ベレーン市周辺零細漁村における持続的開発プロジェクト」が終了しました。活動内容につきましては、本誌No.6「海をわたったワクワクきびなご塾」に紹介しましたが、最終年の2008年は、ちょうど日系移民100周年ということもあり、鯉のぼりネタや、折り紙ネタを織り交ぜて、さらに楽しく、充実した活動で締めくくることができました。JICA九州をはじめ、お世話になった関係者の皆様に改めてお礼申し上げます。

さて、ブラジルには、現在、150万人もの日系人が暮らしています。一般的に日系人はブラジルのなかで「できる人」と一目置かれています。これも1908年に移民船「笠戸丸」でサントス港に到着した約800名から始まる初期移民の方々の、想像を絶する努力の結果だと思えます。今回、アマゾン地域の入植地のひとつ、トメアスーを訪れる機会があったのですが、資料館では、私たちの祖先（といっても4、5世代前の方々ですが）の凄まじいパワーに圧倒され、時間を忘れて当時の写真や資料に見入ってしまいました。こうした方々が、現在のブラジルの発展に大きく寄与したことをブラジルの日系人も、日本人も忘れてはな

らないと思いました。

滞在中、テレビでは連日、日系移民100周年の話題が流れ、7月には皇太子殿下、麻生太朗総理（当時外相）をはじめ、多くの人々が駆け付けて、ブラジル各地で盛大に記念式典や、催し物が開催されました。パラ州の州都ベレーン市でも、州統領を招いての式典や、ショッピングモールでの「日本週間」イベントなど、今回ほど「日本」をあらゆる場所で目にする滞在はありませんでした。それだけ、ブラジルの中で「日本」は広く深く受け入れられているということなのでしょう。

その一方で、私が活動していたアマゾンの田舎町では、まだまだ日本は不思議の国のようです。仕事を手伝ってくれた専門学校生との会話。

「日本人は魚をナマで食べるってホント？」

「えっ？知らなかった？」

「えー！信じらんない！」

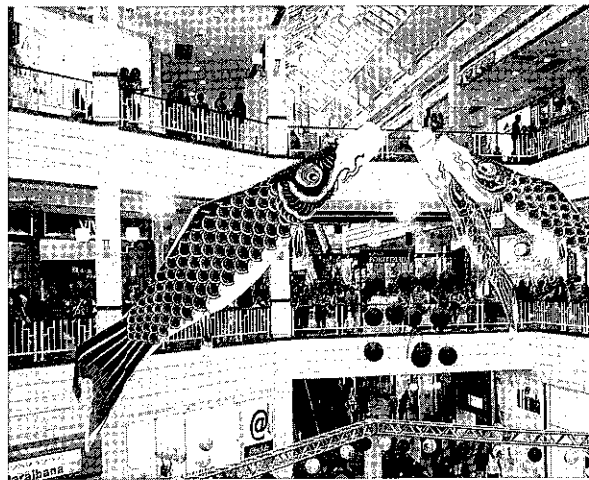
「美味しいよ。今度一緒に食べに行こうよ。」

「絶対ヤダ！気持ち悪くない？」

「俺が住んでる町では、鶏もナマだぞ！」

「※△×□#@%！！」

これで彼女の日本人のイメージは、おそろしく野蛮な人種、あるいはオジーオズボーン（それ系のパフォーマンスで有名なミュージシャン）で固まってしまったかも知れません。



日本週間イベントで日本一色のベレーン市のショッピングモール



トメアスー資料館にて・移住当初の楽しみはやはり活動写真と音楽！



随所で日本と鹿児島を宣伝しました



鯉のぼりならぬ地元の将来の有望食用魚・アラ  
クーのぼり



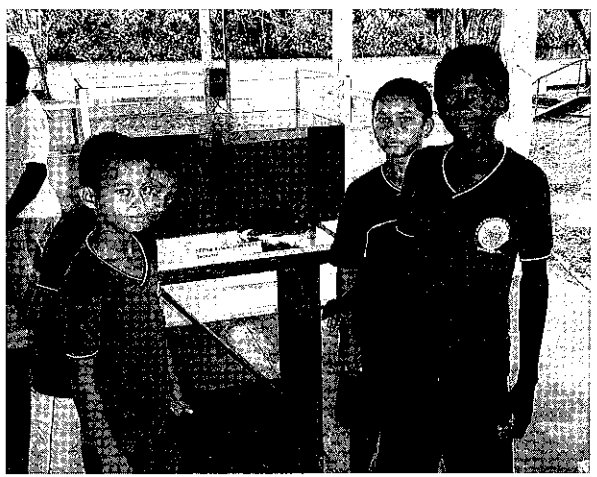
結構器用に折り紙を折るイニャンガピ村の子供たち



折り紙にハマるイニャンガピ村の小学校の先生たち



金魚帽子の完成！サムライ帽子にも変身できて好評



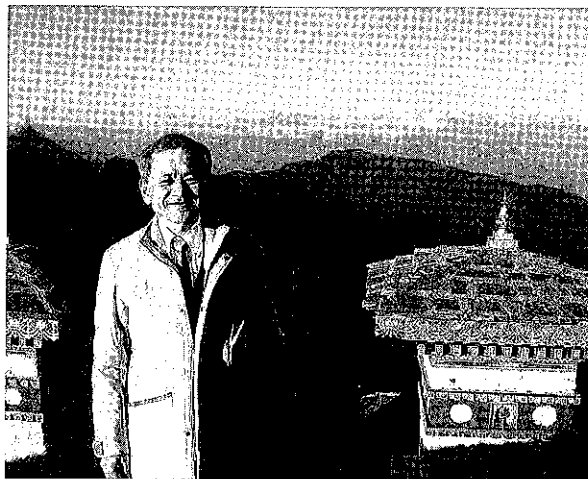
ミニ水族館は相変わらず大好評

## ブータン職業訓練調査団に参加して ～ブータンの暮らしを垣間みる～

ポリテクカレッジ川内 馴田 義美

今回、ブータン職業訓練調査団4人の一員として、2008年12月8日から12月19日まで滞在する機会を得ました。目的は、クルタン職業訓練校の電気コースを主とした職業訓練指導員の能力向上及び労働人材省（2003年に教育省から分離設立）へのカリキュラム作成等援助プロジェクト詳細計画策定のためです。クルタンは、かつては冬の首都であったプナカに隣接する小さな町です。ご承知のように、ヒマラヤ造山運動によって、急峻な地形を持つブータンは、農耕地としては、渓谷の斜面しか適しません。村は、それらの山々に囲まれた谷や丘陵に点々とありました。クルタン職業訓練校も、プナカ・ゾン（僧院兼役所）で合流したプナ・ツァアンチュ川を少し下った河原にあります。敷地内には、ブータン様式の民家風の本館、実習場、寮などが配置され、ここに、訓練期間2年の機械、電気、ITの3コース168名の訓練生がいます。訓練生は、一番早くて16歳から入学できます。スクール・リーバ（いわゆるニート）の問題を抱えるこの国では、今後10年間に訓練校を4校増設する計画を持っています。学費、寮費、食費全て無料の上に、月の手当も支給されます。義務教育制度は持たないのですが、7歳くらいから小学校には入り、2008年調査の就学率は、初等教育が88%、中等教育が85%です。授業は、国語の

「ゾンカ」以外はすべての教科が「英語」で行われています。なお、職業訓練校は、この国でも後期中等教育のひとつとして、位置づけられています。ここで、私は、電気関係の機材を中心に、電気コースの実習場内で汗かきかき写真を撮って回りました。というのは、緯度的には沖縄とほぼ同じで、標高1300m前後のため、川近くにはサボテンが自生するくらいの気候なのです。訓練生は、とても礼儀正しく、私たち調査団メンバーが実習場に入ると、起立してくれました。この国の教育の躰のよさを感じる一幕でした。



標高3100mの生活道路「ドチュ・ラ（峠）」とヒマラヤ遠景



クルタン訓練校で若い指導員と  
(女性の衣装が「キラ」)

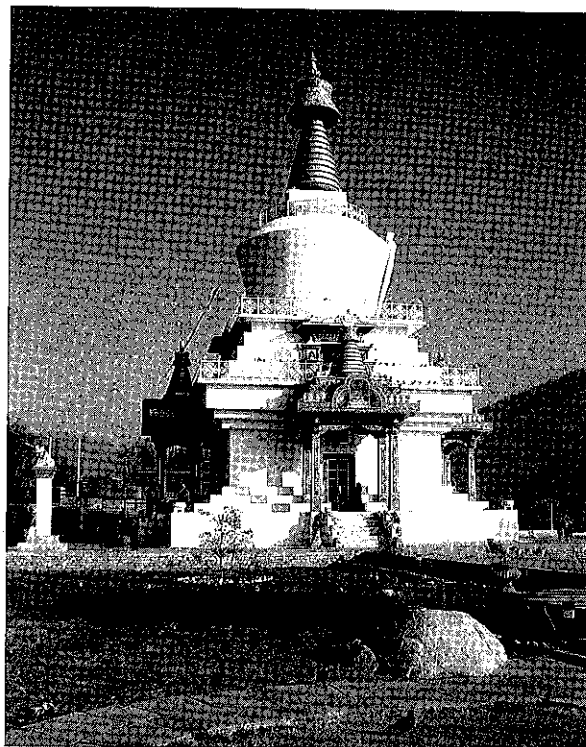


かつて夏の首都だったプナカのゾン



さて、クルタンまでの道のりは、車で標高2500mの首都ティンブーから、生活道路である3100mのドチュ・ラ（峠）まで、曲がりくねった登りだけの1時間40分、それからプナカのホテルまで、下りだけの1時間余りあわせて約2時間40分を要しました。彼らが、3000mから4000mは「丘」という意味がわかった気がしました。7000m以上の万年雪を頂く峰々を彼らは「山」と呼んでいます。

さて、ほんのわずかな滞在でしたが、ブータンで経験したことや感じたことを記します。会報NEWSLETTER No.6（2007年発行）の中で、「私のアジアで体験したこと」を高間英俊氏（現在は、鹿児島大学退職、JICAへ復職）がインドとの国境の印象を緊張感がないと書いておられます。インドとの関係は軍、政府、民間問わず政治経済的に、非常に深い関係があるため、インドとの国境検問は、緩やかであると思われます。2006年統計では、インドとの貿易が輸出約8割弱、輸入が約7割弱を占めています。輸出品目の第一位は、ヒマラヤ山系の豊富な水を利用した水力発電です。大使館は、インドとバングラディッシュの2国だけ設置されていますが、基本的に自由に国内を移動することはできません。外国人の国内移動は、予め内務省の許可を得る必要があります。県境には、必ず検問所があり、車を止め、通行許可証を検問所の係官に提示する必要があります。国内の一般旅行者もバスを止められて例外なくチェックを受けていました。こうしたことが行われる歴史的背景として、中国との関係を知る必要があります。ブータンは、古来、宗教的にも人的にもほぼチベットとの交流を主としてきました。国の成り立ちも、チベットからの政治宗教亡命者でできたといわれています。チベットと幾度か戦争もしていますし、そのための砦として山の上にゾンが建てられたという経過があります。そうした交流が途絶えたのが、中国による1951年のチベット併合です。1959年ダライ・ラマがラサから脱出、これを契機に、チベットとの国境を閉鎖し、中印国境問題を抱えるインドが接近してきました。当時の国王は、大きな政策転換を迫られ、インドとの関係を深めていきました。道路整備、最大の輸出資源を生み出す水力発電所建設にしても、インド



首都ティンブーのメモリアル・チョルテン（仏塔）からの無償援助と借款です。首都周辺では、工場らしい建物はみかけませんでしたが、今回別の調査団員の一人が訪問した国境の町ブンツォリンには、国内で唯一工場群が並んでいます。そこにある工場も、インド資本がはいっていると聞きました。実際に、一部のものを除けば、町で売っている生活用品や食品は、ほとんどインドやタイ、中国製品でした。インドとの関係をうかがわせるものは、通貨「ニュルタム」にも現れています。インドでは使えないのですが、逆に「ルピー」はそのまま国内で1：1のレートで使えました。

私が最も印象に残ったのは、人々の宗教心です。仏教以外の宗派は別として、私たち日本人が、普段の生活で仏教徒であると感じる時は一体どれほどあるでしょうか。お盆や年忌、そして葬儀など機会のごくごく限られていると思います。唱えられる念仏にしても、本当の意味を知る日本人は、私を含め、ほとんどいないが実情ではないでしょうか。ブータンでは違いました。チベット仏教（正確には、ドユック・カギユ派）を国教とするこの国では「オン・マニ・ペ・メ・フム」を唱えながら、チョルテン（仏塔）を、右まわりに数回まわる人々が数多くいます。仏塔入口のマニ車を回し、あるいは、小さな携帯用マニ車を回しながらお参りする老人、朝夕の出勤時や退社時に、民族衣装の「ゴ」

(男性の正装)や「キラ」(女性の正装)を着た公務員らしき人々、仏塔には、時間を問わず誰かがいました。その中には、五体投地を繰り返しながら祈る人々の姿もありました。私も、朝の散歩がてらに何日かお参りしましたが、おのずと厳粛なものを感じざるを得ませんでした。

ブータン人は、一生を終えると必ず何かに生まれ変わる「化身」を信じています。そのために、あらゆる動植物は大切にされ、例えば、首都のメイン道路で、野良犬が闊歩していても、誰も追いつ返そうとしません。鳩は、頭すれすれに飛びまわっていますし、鳥などは人や車が近づいても逃げようとしません。また、生まれ変わりを信じるために、お墓はありませんし、年忌もありません。ひたすら、よりよく生まれ変わるために現世を生きる彼らは、私からみれば「修行」をしているようにも見えました。でもそれを行っているのは、僧侶ではなく、一般の民衆です。また、調査で訪問した会社の会議室にも立派な仏壇があり、タンカと呼ばれている仏画が飾ってありました。まさに、この国では仏教が生活の一部として生きているのだと思います。

車で移動していると、チョルテンは、大小問わず町の中の色々なところで見られました。そしてもうひとつ目につくのが、山々の斜面に風にはためく「布」の列です。これは、経文を記した縦の布が「ダルシン」、横に並べられたのは「ルンタ」と呼ばれるものです。風にふかれ、はためくたびに経文を読んだことになり、民衆が立てたもののだそうです。そんなチョルテンのひとつに、ブータン農業の父と呼ばれる西岡京治(けいじ)を偲んで建てられたものがありました。場所は、パロ空港から車で25分ほどの丘です。彼は、1992年に59歳で亡くなるまで28年間、農業専門家として、米の品種改良、換金作物である太根などの野菜栽培、水田の区画整理、農業機械化などに尽力しました。また、米の増産を通して、貧困地域の自活を実現した人でもあります。西岡氏は、生前、当時の国王により、外国人として初めて「ダショー」(爵位)の称号を得て、今でもブータン人の尊敬を集めています。葬儀の際は、国葬だったそうです。また、学問的にも、大麦栽培史(大麦野生種の発見)で



マニ車を回して祈る人々  
(回した回数だけ経文を読むことに相当)

の業績に貢献しています。彼が働いた場所は、今は、「農業機械化センター」として、農業機械の修理や部品補充、農家への農業機械指導などを中心にしたものになっています。そこには、今も九州にゆかりのある農業の長期専門家が一人活躍中です。

こうした西岡氏やその後のジュニアやシニアの協力隊諸氏の尽力のおかげで、今もブータンと日本との関係は良好です。現在でも、JICAやADB(アジア開発銀行)などの派遣専門家やJOCVのジュニアやシニア隊員も合わせて40名から50名いると聞きました。人口が、約65万くらいの規模の国にしては、比率的には大きいと思います。建築デザインのSVで活躍中の上野征夫さんにも話を聞く機会がありました。昨年10月開催の鹿児島でのSV説明会の時に、DVD放映の中で紹介された人でしたので、会った時に初対面の感じがしませんでした。労働人材省の正面入口のデザインを設計され、奥様の陽子さんが人形制作のSVで活躍中に全くのボランティアで、訓練校のひとつである「伝統工芸学院」内の訓練生の作品を展示販売するショーケースや展示会場の内装設計までされたのだそうです。その一部がブータン初のタンカ(仏画)を飾る大きな木製のショーケースです。

食生活についても少し触れます。基本的には、米を主食としています。ジャポニカ米やモチ米もありますが、ブータン人は赤米を好んで食べます。代表的な料理は、「エマ・ダツツイ」です。これは、「主食」である唐辛子(エマ)を、チーズ(ダツ

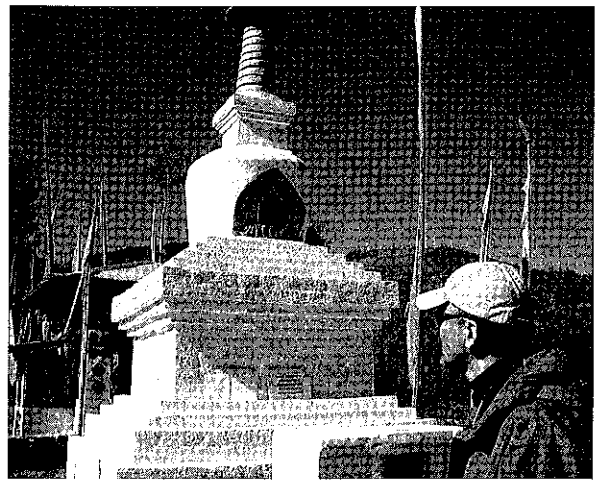


ツイ)であえたもので、田舎ではこれが毎日続くとともに聞きました。味は、辛さに慣れてない人には、食べづらいと思います。幸い、私は、短期派遣で2回行った際のメキシコ料理の免疫があったのか、さほど辛さを感じませんでした。この「エマ・ダツツイ」を食べながら、辛さを米で薄めていくような食べ方をします。他に、人口9万とも推定される首都ティンブーだけですが、タイ料理店、インド料理店、中国料理、そして協力隊員がブータン人に仕事の合間に教えて開店したといわれている日本料理店などもあります。また、メニューには載っていないのですが、「プタ」と呼ばれるソバを食べさせてくれるところもあります。ただ、ソバは、野菜や卵を少し入れて、油で揚げたものが出てきます。つゆ入りのソバを食べることは残念ながらできませんでした。また宗教上の理由で、魚の殺生は禁じられ、許可証を得ない限り勝手に釣ることはできません。ただ、インドから輸入の干し魚は市場に出回っているそうです。肉類は、チキンや少し硬いですが牛肉やヤクの干し肉も食べられました。

レストランでは、地元産ビールやスペシャルクーリエ(ウイスキー)も頼めます。しかし火曜日は、禁酒になっていました。面白いのは、焼酎に似た地酒の「アラ」で、料金をとってはいけないうシステムになっていて、独特の容器のストロー状の注ぎ口から、いくらでもリクエスト可能です。私は、上戸ではないのですが、これも食事の合間に、少し味見をしました。

また、近隣の農家が、米や野菜を持ってくるサブジバザール(野菜市場)も開かれています。木曜の午後から日曜まで開かれるこの市で、野菜類の多くを買いますが、市内の八百屋でも買うことができるそうです。日曜日の夕方、そこに行きましたが、売り手は、地面に野菜類を並べて、買い手はその合間をぬって進むという大変な人出でした。ネパールやインド人の移民労働者達も、野菜類の安くなるこの時間帯に大勢押しかけていました。こんな人ごみの中でも、危険は全く感じることはなく、治安もいいと感じました。

ここでブータンを旅行してみたい方へのガイド



西岡チヨルテンとダルシン

を少ししておきます。現在、外国人が旅行する場合、年間の受入人数に制限があり、3000人ほどと聞きました。最近では個人旅行もできるようになったようですが、それでも必ずブータンの旅行社を通してビザを入手しなければなりません。個人が、直接ブータン政府からビザを取得して入国することはできません。

すでに述べたように入国に内務省イミグレーション局の許可が必要で、最低4週間は、かかるそうです。旅程は、鹿児島から行く場合、福岡からタイ経由で行けます。空港はパロしかありませんので、便の関係で行きはタイで泊まることとなります。帰りは、泊なしで帰れます。費用は、航空運賃以外に、ガイドと運転手付の車、宿泊、3食付で一人一日240US\$ (ハイシーズンは260US\$) かかると聞きました。現に、岡山から来た新婚旅行中のカップルは、最近解禁になった民泊を主としていましたが、相当な費用になったと語ってくれました。もっとも、昨年12月初めは、タイのスワンナーブ空港占拠の影響もあったのは確かです。ネパールのカトマンズ経由で香港、関西空港へ帰ると言っていました。

今回の調査旅程では、直前になってインドのデリーからカトマンズ経由でパロに行かなければなりませんでした。このルートではいると、カトマンズからパロに近づくにつれて、ヒマラヤ山脈がどんどん窓の外に迫ってきますので、私のような山好きにとっては、こたえられない景色を堪能できます。

めったに知られることのない国ですが、それで

も時々、マスコミ等でブータンについて報道があります。昨年は、新国王の戴冠式も行われたのでごらんになった方も多いでしょう。今年になって1月10日にブータン特集が2本放映されました。その際に必ずGNPではないGNH (Happiness) をめざす国として紹介されます。ブータンは、国王親政から、初の国会議員選挙も実施され、2008年7月18日の憲法発布を経て、立憲君主国としての道を歩んでいます。また世界の中で、節度ある経済発展をすすめていく政策をとっています。産業基盤の薄い国ではありますが、自国に誇りを持つ国、ポリシーを持つ国といてもいいと思います。何かの機会に皆さんが、この国を訪れたら、このヒマラヤの仏教国におそらく私が感じたような魅力をみいだされるに違いありません。



12月17日建国記念日、  
サッカースタジアム後方にタンカ (仏画)



信号機のない国、手信号の警察官



カトマンズからパロに向かう途中のヒマヤラ山脈

## 平成20年度「連絡会」活動報告

- 1 活動名：高校教科書に見るODAに関する記述の調査  
実施内容：高校教科書「公民」、「現代社会」などを購入した（ODAに関する記述の調査や問題点等の整理は次年度に実施する予定）。  
実施時期：2008年12月購入
- 2 活動名：国際理解教育に関する授業の開講  
実施内容：鹿児島大学で授業科目「国際交流のすすめ」を開講した（受講者数97名）。  
実施時期：平成20年度前期（2008年4月～同年7月）  
実施場所：鹿児島大学共通教育棟4号館
- 3 活動名：JICA九州の活動の後方支援  
(1)実施内容：鹿児島大学で、大学院生を対象に青年海外協力隊員募集説明会を開催した（参加した大学院生16名）。  
実施時期：2008年4月23日（水）  
実施場所：鹿児島大学共通教育棟4号館  
(2)実施内容：JICAによるシニア海外ボランティア募集説明会に鹿児島大学教職員を参加させるために、事前に教職員72名にパンフレット等を配布した（参加した教員4名）。  
実施時期：2008年10月  
実施場所：鹿児島大学
- 4 活動名：鹿児島大学との連携強化  
実施内容：「鹿児島大学ボランティア支援センター設立記念シンポジウム」参加者に、JICAのパンフレット「JICAボランティア」とチラシを配布し、シニア海外ボランティア等への参加を呼びかけた（100部配布）。また同センター長（理事）に、国内ボランティアだけでなく国際ボランティアも扱うように依頼した。
- 5 活動名：九州各県のJICA派遣専門家連絡会との連携強化  
実施内容：宮崎県JICA派遣専門家連絡会との連携強化を図った。  
・永田雅輝会長に「NEWSLETTER」の原稿を執筆してもらった。  
・永田雅輝会長に総会で講演をしてもらい、意見交換を行った。  
実施時期：2009年2月28日（土）  
実施場所：KKR鹿児島敬天閣
- 6 活動名：会員の経験活用  
内 容：本会のパンフレットを配布し、要望があれば講師派遣や寄稿を行う。
- 7 活動名：会報誌「NEWSLETTER」8号の発行  
実施内容：300部（例年並み）印刷した。  
実施時期：2009年2月
- 8 活動名：会員名簿の作成  
実施内容：会員名簿を作成した。  
実施時期：2009年2月
- 9 活動名：総会の開催  
実施内容：総会を開催し、平成20年度活動報告、平成20年度決算報告を行い、平成21年度の活動計画案や予算案を審議した。  
実施時期：2009年2月28日（土）  
実施場所：KKR鹿児島敬天閣
- 10 活動名：講演会の開催  
実施内容：宮崎県JICA派遣専門家連絡会 永田 雅輝会長  
演題「宮崎県JICA派遣専門家連絡会の紹介」  
実施時期：2009年2月28日（土）  
実施場所：KKR鹿児島敬天閣

# 平成19年度「連絡会」総会報告

幹事 馴田 義美

開催日時 平成20年3月1日(土)16:08～18:00

開催場所 KKR鹿児島敬天閣

## 1. 総会議事

1) 開会 大富幹事 司会進行

2) 会長挨拶 市川会長

今年度は無理のない形で活動していく方針でやってきました。この会のやるべき申し合わせ事項は6項目(NEWSLETTERの裏表紙参照)あります。今回で会長を退任しますが、県主催やその他のイベントに参加して、様々な人と知りあえて大変参考になることが多かったと思います。会長をやる前と後ではずいぶん意識が変わったような気がしています。

3) JICA九州国際センター挨拶 田邊 秀樹氏  
(業務第一チーム主査)

JICAが独立行政法人化して4年、今年度は技術協力に加えて援助金融業務も含めた新組織として今年の10月から再発足します。国内機能の再編強化の中で、派遣専門家連絡会の機能変更を説明するため九州各県の専門家連絡会を昨年3月12日開催しました。

JICAが派遣専門家連絡会に期待する活動は、自主的運営をする中で、国際協力に対する市民への理解促進活動を主としながら、従として会員相互の情報交換、会報発行、総会開催、出前講座開催、イベント参加を通じて市民活動を推進することです。

JICAの現状は、ODAは次年度4%削減、現在のJICAも1.4%減で引き続き削減の最中です。今年は、洞爺湖での環境サミット、ブラジル移住100周年、5月のTICADアフリカ開発会議をひかえています。資料として鹿児島県内のJICA活動を配布させていただきました。今回、JICA国際協力推進員が交替(原さんから清水さんへ)しましたので、引き続きご協力をお願いします。

4) 議事

4-1) 平成19年度活動報告

a) NEWSLETTER第7号の発行(市川会長)

2月29日完成したが、内容は、お願いして書いていただいた原稿3本と会員からの投稿2本それに昨年の報告です。NPO活動でJADDO(じゃっど)が昨年9月にMBC(南日本放送)賞を受賞しましたので、会員の帖佐先生には、そのことを書いていただきました。

また鹿児島大学の学生約10人をITPプログラムで年間5000万円の予算でマレーシア、インドネシアに派遣している事業について鈴木先生に紹介していただきました。さらに県青年海外協力隊を支援する会の事務局長である弓場さんには青少年国際協力事業について執筆していただきました。今回は300部印刷しましたので、今後の活動に生かしていただきたいと思います。

b) 会員名簿の整理(事務局の北さん)

3年ほど前から、会員名簿について個人情報保護法との関連で議論をして氏名と住所連絡先の公開に制限を設けることにしました。名簿の配布は現在行っていません(昨年のを回覧)。住所やその他の変更等は、事務局に連絡をいただきたいと思います。

c) 会員の活動を経験してもらうための活動＝パンフレット＝(市川会長報告)

今年度は、講演要請がなく残念ながら活動実績はありませんでした。昨年の総会でこちらから働きかけようという意見も出ましたが実質的に活動できていません。ただ、鹿児島大学の中では、実質的にそれに近い活動が行われていると思います。

d) その他

会計報告(平成18年度)予算21万7千円、決算15万8911円、差額の5万8千円余はJICAに返還済みです。平成19年度の予算規模は、19万円ですが、決算は3月末が会計年度ですので次年度の報告になります(資料あり)。

e) 質疑(略)

4-2) 役員改選

会長任期2年、市川会長退任に伴い、会員に立候補呼びかけるも、希望者なく、現在の志賀幹事

を次期会長に推薦。

幹事空席分をJICA30年の経験をお持ちの高間先生にお願いしたい。(拍手で採択)

現在の3名の幹事は、留任でお願いしたい。(その後高間先生異動で、現在1名空席)

#### 4-3) 平成20年度活動計画案

志賀(次期会長):自己紹介:専門は、資源経済学、主として鉱物資源を扱っています。1985年チリのコンセプション大学で長期で1年半、1996年北京の中国科学院へ長期1年、その後2001年まで毎年短期派遣の経験があります。

今年度も最低限の活動としてNEWSLETTERの8号の発行はしなければなりません。会員名簿の整理、会員の経験を活用する活動、4名の幹事も含め今後の方針を協議したいと思います。先日の幹事会で、新会長の就任の話があり、逃げ場がなく引き受けざるを得ないと感じました。思い起こせば、16年前にサンロイヤルホテルでこの帰国専門家連絡会の名称で発足しました(平成4年3月末発足当時の趣旨申し合わせ文書を紹介)。初心に帰って、今読み上げてみました。以来、この会として、色んな活動をやってきました。最近パンフレット作成して活動しようとしたがうまくいきません。今は、手詰まり状態にあります。皆さんから斬新なアイデアをいただければ大変ありがたい。気になることは、メンバーの固定化、高齢化です。新メンバーが、なかなかはいらない現実があります。私自身仕事面でも、毎日のように会議つづきでかなり忙しく、派遣そのものに行きづらい状況で、学内では派遣経験がほとんど聞かれなくなっています。新鮮なものは聞こえてきません。会の存在そのものの意義が薄らいでいます。私自身は、このことに危機意識を持っています。さきほど、佐賀や長崎の例が出ました、開発教育の普及に期待ということであれば、会としてはたいしたことはやっていなくてもそれぞれの会員がそれぞれ活動していることは認めていただきたいと思います。これからも会員のご協力をお願い致します。

#### 5) 閉会

清水卓朗さん自己紹介と挨拶(ベネズエラでJOCV経験)

2004年4月から2006年4月まで、村落開発普及員として、南米のベネズエラに派遣されておりま

した。現地では応急手当や、救助法を村の消防団の青年たちに教えていました。原の後任として2月からJICAデスク鹿児島に着任いたします。よろしく申し上げます。



## 2. 講演

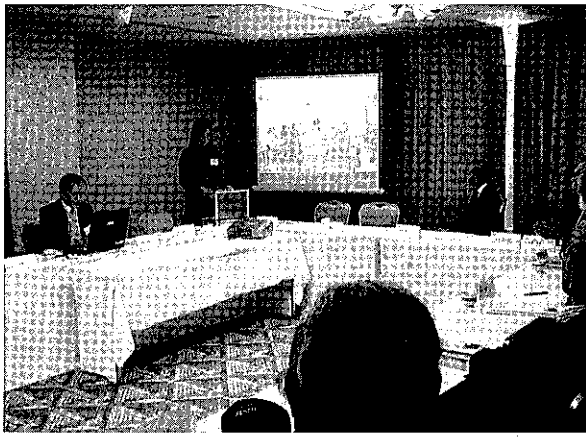
講師:原 奈美(前JICA国際協力推進員、ブラジルパラナ州で日本語学校教師の経験)

演題:JICA国際協力推進員退任にあたって

まず皆さんにお礼も兼ねて、活動報告を致します。推進員が県に配置されて12年、初代の酒井さん(5年半)、2代目の丸野さん(3年)の後をうけて3年(平成17年2月から平成20年1月まで)国際協力推進員として勤めてきました。JICA事業活動の理解と国民参加をテーマに行なうのが本来の役割ですが、私は、県民交流センターで(財)鹿児島県国際交流協会に間借りして県とリンクしながら活動してきました。どういったことをやっているのか説明しにくいのですが、カウンセラーではないが国際関係に興味のある方の相談、協力隊やシニアボランティアに行きたいとか就職活動の一環でJICAを知りたいとかなど多岐にわたっています。十分に応じきれませんが、県民の皆さんと一緒に考えながらやってきました。その他の企画として年1~2回セミナー開催(一般や教員対象向け)や地方のイベント活動例えば「砂の祭典」等でブースを出してJICAの広報やJICAの関係団体への協力などなんでも屋的に行っていました。

(=>以下パソコン利用して、活動の画像提示しながら)

先生向けセミナーでは参加型ワークショップで



国際協力の情報提供、開発教育分野、教材提供や活用などの教員セミナーをやりました。参加者に民族衣装を着ていただいたり、途上国では子供がやっている水汲みを、実際に水がめを頭に載せて重いを実感していただいたり、JOCVのOBや外国人を交えてのグループ討議をしたり、色々な立場の人との出会い場所の提供、学校ですぐに伝えられるような教材の提供も行ないました。これまでは、総合学習の時間が、国際協力を理解することに当てられてきましたが、最近は食育とか、福祉、環境に教員の関心がそっちに移っています。どちらかと言うと、若い教員の方が熱心で一度教材を手にとると応用のノウハウは持っているように見えます。そうした方々からパワーももらいました。

また、一般の人対象のセミナーをしていて感じたのですが、参加者は10歳代と、飛んで、40歳代から60歳代が多かったのですが、若いからといって頭が柔らかいというわけではないということに気づきました。知識や情報だけで判断しがちな若い人より、経験を積んだ方の方が、逆に柔軟性があることもわかりました。どんなことを感じているのか等を知る機会にもなりました。ネパールから看護技術を学びに来ている人やJOCVのOBをゲストにして意見交換の場所の提供などもしてきました。また、キーワードから世界の人とつながっていることを感じてもらうこととか「貿易ゲーム」を通じた商品流通シミュレーションなどを通じて経済の流れとか貿易摩擦とかを感じたり、からみあった手をどうほどいていくかという「人間知恵の輪」などを通じて、問題解決に積極的に行動したか傍観していたかをみることなどをやってきました。

また県民交流センターでのJICA広報活動で、

協力隊OBの撮影した写真を子供対象のフェスタで紹介もしました。毎年恒例の南さつま市での「砂の祭典」等でJICAクイズを通じてのフェアトレードの紹介とクイズに答えてのコーヒーの試飲なども行ないました。自然やものを大事にするのが国際協力だとか協力できる子供に育てるという母親のメッセージとかあって私自身学ぶことも多かったです。

奄美で初めてのセミナーで、JOCVのOBの協力やマレーシア人を招待しての料理教室も開きました。小学生対象のセミナーでは、伝えることが難しいがここはどこでしょうとかの問いかけを通して外国への気づきをしてもらいました。タイヤとゴムのことを話題にして、子供の目線で話しをしたことも貴重な体験でした。子供が来れば保護者の親も同伴して来るので熱心に興味を持ってもらえることもわかりました。

また、青少年国際協力体験活動で県の中高生をマレーシアに派遣して協力隊活動の現場を訪問する事業にも企画準備から同行までお手伝いしました。

3年間の中で未熟さを感じながらやってきましたが、鹿児島県の中では、ひとりひとは国際協力に関心を持たれていると思います。市外に行くほどホームステイ受け入れなど、人情がある地域ほど行動力はあると感じます。ただ、関心はもたれても機会や場所を提供するコーディネータが少ないため国際協力に関われないのではという印象を持ちました。

専門家の方々とは、個人個人の方々には大変お世話になりました。まだ客観的に、推進員としての仕事を振りかえることはできないでいますが4代目の推進員も配置されましたので、私のできなかったことなどをしていただいていたと思います。これまで色々支えていただきありがとうございます。

(質疑略)

# シニア海外ボランティア 日系社会シニア・ボランティア 募 集

---

年齢 40～69歳

派遣期間 シニア海外ボランティア：1年間または2年間。

短期（1～10ヶ月）もあります。

日系社会シニア・ボランティア：原則2年間。

所属先に身分を置いたまま参加する場合、  
JICAから所属先に人件費の補填があります。  
無職の方が参加する場合は、国内積立金が支給されます。  
詳しく知りたい方は、募集説明会に参加してください。

募集は、年2回あります（春と秋）。

〈平成21年度春のシニア海外ボランティア募集説明会〉

4月22日（水）18：30～

鹿児島市勤労者交流センター（鹿児島中央駅前「キャンセビル」内）

---

お問い合わせ

JICA九州

電話 093-671-6311（代表）

E-mail [jicakic@jica.go.jp](mailto:jicakic@jica.go.jp)

JICAデスク鹿児島

（鹿児島県国際交流協会内）

電話 099-221-6624

E-mail [jicadpd-desk-kagoshimaken@jica.go.jp](mailto:jicadpd-desk-kagoshimaken@jica.go.jp)

# 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成15年2月28日)

## 1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、もてる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

## 2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

- (1)政府開発援助（ODA）進展動向に関する調査研究及び提言
- (2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3)鹿児島県と海外諸国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- (4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

## 3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

## 4. 会長及び幹事

- (1)会の運営を円滑に行うため、当会に会長1名および世話役として幹事4名を置く。
- (2)会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3)幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当る。
- (4)会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5)本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6)本会に臨時会計役を定め、所定の会計処理をおこなう。

## 5. その他

この申し合わせ事項を改変、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

## 編集後記

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報第8号をお届けします。

今年度から当該年度の「連絡会」活動報告も会報に含めることにしました。また、会員へのサービスとしてシニア海外ボランティアと日系社会シニア・ボランティア募集の情報も掲載することにしました。募集説明会に参加してみたいかがでしょうか。

(事務局)

## 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報 第8号

発行 2009年2月

発行者 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会長 志賀美英

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 鹿児島大学法文学部

電話：099-285-8950（直通） Fax：099-285-8861

E-mail：shiga@leh.kagoshima-u.ac.jp